

ジェンダー・女性学研究所

NEWSLETTER 51

Aichi Shukutoku University 愛知淑徳大学

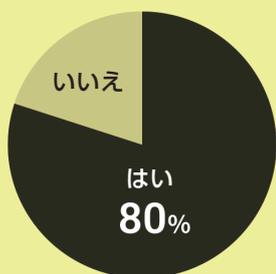
February 2022

君も、飛べる。

愛知淑徳大学生

衝撃のアンケート結果!!!

女性の社会進出は
良いことだと思う人の割合



自分はトップと言われる
仕事に就きたいと思う人の割合



愛知淑徳大学のジェンダー関連授業の受講生を対象にアンケートを実施。日頃のジェンダーやダイバーシティについて、考えていることや感じていることをステレオリムーブ課が調査。



詳細は2頁へ!!

ジェンダー関連の授業を受講している学生に聞いてみた！

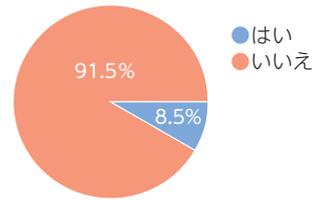
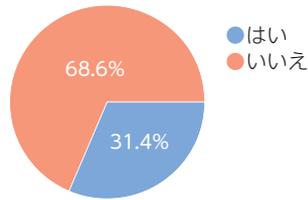
ジェンダー・ダイバーシティアンケート

愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 学生運営委員 ステレオ・リムーブ課です！

2021年11月にジェンダー・女性学研究所提供の授業を受けている方に、日ごろジェンダーやダイバーシティについて考えていることや、大学について思っていることをアンケートで調査しました。こちらにその結果を報告します。(回答数273、うち同意していただいた数271) (北原優奈、川端菜月、柴田莉穂、後藤優花)

Q1. あなたは大学に入るまでに「ジェンダー」について学びましたか

Q2. あなたは大学に入るまでに「ダイバーシティ」について学びましたか

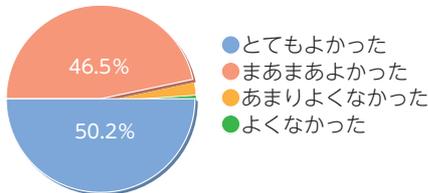


(左から Q1、2)



大学に入るまでにジェンダー・ダイバーシティについて学んだ人は少ないみたいだね

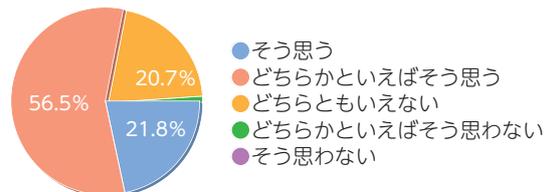
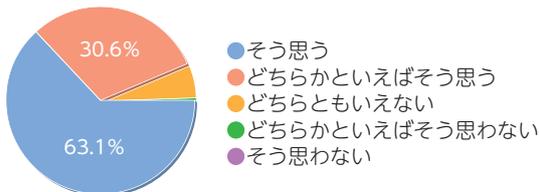
Q3. 大学でジェンダーやダイバーシティの授業を受講してよかったですか



良かったと思っている人がほとんど！「自身の思考が深まり将来に役立つ」といった理由からこのような結果になったよ！

Q4. 愛知淑徳大学にジェンダーやダイバーシティに関する授業があって良かったと思いますか

Q5. 愛知淑徳大学は男女平等や障害を持つ人に対しても理解があると思いますか



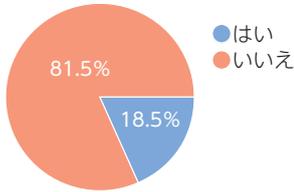
(左から Q4、5)



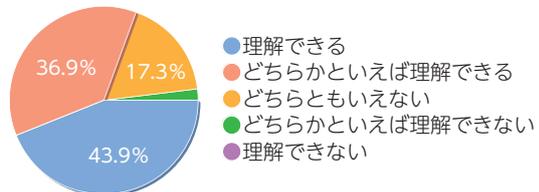
大学としてもジェンダーやダイバーシティに理解があると思ってもらってるみたいだね！

【自身の意識や社会に対する意識について】

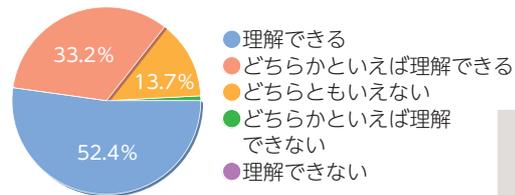
6-1. 自分の性について疑問を持ったことがありますか。



6-2. もし知人、友人や家族に性について疑問を持っている人がいたらその人を理解できますか。

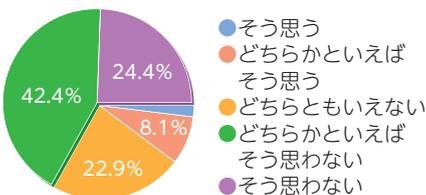


6-3. もし周りにLGBTであることを開示している人がいたら、その人を理解できますか。



自分の性に疑問がなくても、周りの人の性の悩みは理解してあげられるんだね！

7-1. 日本は男女平等もしくはそれに近いと思いますか。



9-1. 愛知淑徳大学は男女平等や障害を持つ人に対しても理解があると思いますか。

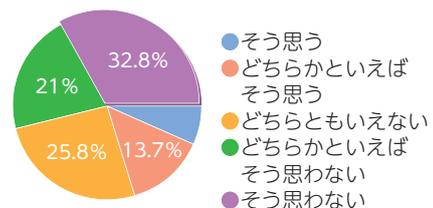


日本はまだ男女平等とは言えないけど、愛知淑徳大学は男女平等で障がい者にも理解があると思っている！

8-1. 日本は女性活躍推進法などが成立され、女性の社会進出を後押しし、女性の社長や役職を持つ者、議員の数などを増やそうとしています。これは良いことだと思いますか。



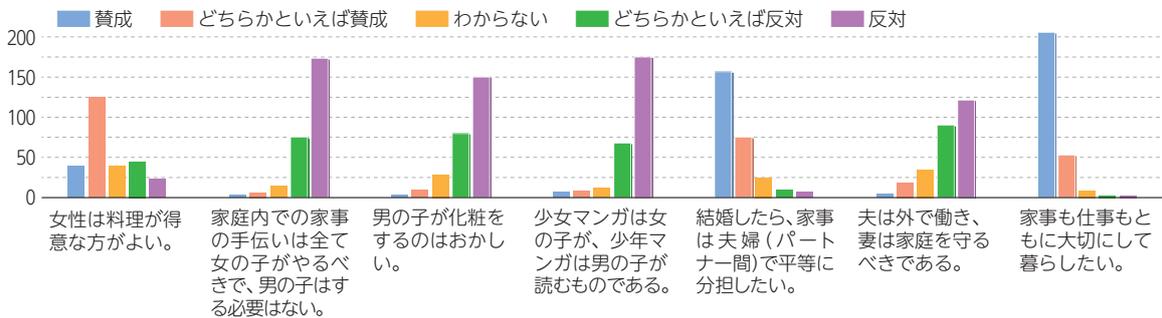
8-2. あなた自身は将来、社長や議員などトップと言われる仕事に就きたいですか。



おっと！日本の女性進出はいいと思っているのに、自分がやるのは嫌なんだ？！自分がやるとなると違うのかな？

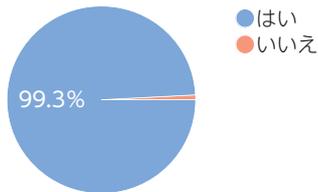
【男女の固定概念について】

5-1. あなたは以下の考え方にどのくらい賛成ですか。



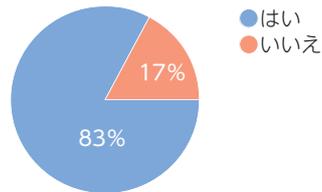
平等を意味する回答が多かったよ。「女性は料理が得意な方がよい」は賛成が多かったけど、男女問わず…ということかな。

3-2. 中学や高校に制服はありましたか。



最近、ジェンダーの観点から制服問題が良く取り上げられているけど、やっぱりみんな制服が良いみたい！

3-1. 中学や高校には制服があった方がいいと思いますか。



【総合まとめ】



みんなご協力ありがとうございます!!女性の社会進出は、良いと思っているのに、実際に自分がやるとなると違うみたいで、少し不思議だったよ。制服も男女の固定概念が出てしまいがちだけど、あった方がいいという回答が多くて、もっと深く知りたくなったよ。

【所長からの一言】



自分は性の悩みがなくても、他者のことを思いやれることがわかりました。授業の成果だと嬉しいです。ただ、他者の社会進出は良いと思っているのに、自身はあまり積極的ではないことがわかり、とても残念。愛知淑徳大学生はもっとできるんだよ！自信を持ってほしいし、自信をつける授業をしなくてはいけません！

相手に寄り添う管理栄養士を目指す

健康医療科学部健康栄養学科4年 榊原 慎也



私の目指す管理栄養士という職業は、女性が多い職業の一つで、所属する学科も1学年85名中、男性は5名である。私は栄養士を志望してこの学科に入ったわけではない。大学入試で紆余曲折を経て、この学科に入学した。そのため、入学当初は、女性が多い環境に戸惑い、自分はこの嫌でも目立つ環境で4年間過ごすことができるのだろうかという毎日の様に悩んだ。

そんな中、1年生の後期に、愛知淑徳大学クリニックで、管理栄養士の仕事を間近で見学した。クリニックで働く管理栄養士の方から、食生活から健康面をサポートすることが管理栄養士の仕事であり、食習慣を変えるには時間がかかるが、褒めるポイントを見つけ、ポジティブな言葉をかけながら患者さまとの信頼関係を築くことが重要だというお話を聞いた。食事だけではなく、やる気を引き出すコミュニケーションや患者さまに寄り添う姿勢など、管理栄養士として大切なことを学んだ。この講義をきっかけに、食を通じて患者さまに寄り添う管理栄養士を目指したいと思った。

その思いは臨地実習をきっかけにさらに強くなった。臨地実

習では病院に行き、栄養指導や回診などの見学を行った。栄養指導では、20分という短い時間の中で、主に男性の管理栄養士が、対象疾患に合わせた食事療法の提案、調理法や献立の提案を行っていた。栄養指導中に、患者さまが管理栄養士に対し、少しずつ心を開いて自らの食生活について話す姿に感動した。指導を受けに来る方が抱える問題は様々な中、適切な栄養指導を行うためには、一人一人の話に耳を傾け、課題や解決策を個別に見出す必要があり、そのためには、コミュニケーションをとって、信頼関係を構築する必要がある。栄養指導では、男性、女性である前に、まず1人の人間として信頼を得ることが大切だと教えてもらった。

栄養学科で過ごした時間は、自分のこれからにとって大きな経験になったと思う。この学科で約4年間過ごして感じたことは、管理栄養士という職種は、男性と女性が共存し、年齢や性別関係なく相手を理解することで、より良い健康面へのサポートをすることができる。相手に寄り添う管理栄養士を目標に、これからも国家試験に向けた勉強に励み、頑張っていきたい。

志望動機と実習での気づき

福祉貢献学部福祉貢献学科 子ども福祉専攻3年 佐藤 和磨



私は大学受験時、進路選択に迷っていた。理系だったためクラスメイトなど近い関係にある友達の多くは理系学部に進路を決めていた。迷っていた理由は単純に理系で習う授業からの逃げや、理系学部に進学することに対して魅力を感じることができなかったからだ。

福祉貢献学部子ども福祉専攻は保育士資格及び幼稚園教諭1種免許が取得できる専攻である。保育・幼児教育を学ぶ子ども福祉専攻に進路を決めた学生の志望動機は多々ある。自分の通っていた園の幼稚園教諭や保育士に憧れて、この専攻を選んだ人も多し、私の志望動機は、単純に「昔から子どもが好きだった」からだ。私が小学校中学年の頃から、乳幼児とかわる機会があり、遊べる時間があれば、時間を見つけ遊んでいた。自分の年齢に近い友達と遊ぶことそっちのけに遊ぶほど好きだったことを憶えている。

この専攻を進んで、保育を学んでいく中で、実習にも出かけているが、男だからという理由で違和感を覚えることはあまりない。それよりも一人の人間として、子どもという人とかかわる難しさを日々感じている。例えば、子ども同士ですれ違いがあった時、保育者はまず、子どもから何があったのか聞いたり、その場を見ていた場合は両者の思いを聞いたりする。子どもの年齢によってはうまく伝えることができない子もいるので、会話をしながら何があったのか聞くことになるが、理解するのが難しく、それに伴い対応も難しくなることがある。実習を通してこのような場面があった。

年長児の保育室で玩具を使って遊んでいたA君。片付ける

時間になり実習生から声を掛けられるも、A君は遊び続けていた。それを見て片付けようとしたほかの遊びをしていたB君と、今ちょうど片づけようと思っていたと言うA君が言い合いになった。私は「今度から時間通りに片づけて、じぶんでできるようになる」という意味の声を掛けた。少し経つと担任の保育者が戻ってきて、両者の話を聞き、2人で片づけをするように声を掛けていた。私はこれまで、その場面における解決法や正解は一つしかないように感じていたが、保育の中では一つではないと感じる学びの場となった。

一つ、男女差のことで気づいたことは、実際に子どもとかかわる保育者は圧倒的に女性が多いことに比べ、管理職の立場には男性が多いということだ。保育現場がこのような社会的な状況にあることを理解しながらも、私としては一人の人として子どもに向き合うことを続けていきたい。

このように、私は現場での実習を通して様々なことを感じ、学んできた。残りの大学一年間で、自分の保育観を確立させるように引き続き頑張っていきたい。



エッセイ

『源氏物語』の評価／紫式部の評価



文学部教授 外山 敦子

いまから一千年以上前の平安時代中期、かな文字の発明をきっかけに、女性による文学作品が次々と登場します。紫式部の書いた『源氏物語』もそうした作品の一つです。とはいえ、平安時代を「女性が才能を開花させた時代」とするのは、正確な理解とはいえません。そもそも彼女たちの才能は、後宮施策の一環として男性の政治的野望に奉仕させられるもので、個人の自由な表現活動とはほど遠いものでした。式部もその豊かな教養を買われ、時の権力者藤原道長の娘・彰子の女房(侍女)としてヘッドハントされます。

ところが、出仕した式部を待ち構えていたのは、同僚女房たちによる嫉妬交じりのまなざしでした。式部は無用な軋轢を避けるため、漢学者である父親仕込みの学識を封印して「惚けしれたる人」(何も分からない人)のふりをするようになります。それは「一」という漢字すら人前では書かないという徹底ぶり。そうした努力?の甲斐あって、式部は同僚女房と穏やかな人間関係を築いていきます。

とはいえ、式部はその自己演出にただ甘んじていたわけではありません。式部が残した日記には、『源氏物語』に関する記述がみられます。当時、物語の読者は主に女たちであり、作品そのものの地位も低く、和歌や漢詩文と違って正当な評価を受ける機会はありませんでした。ところが、日記に「源氏」の名とともに語られる読者は、いずれも男性です。それが並の男たちではありません。当代の帝たる一条天皇、宮廷の実質的な最高権力者であった藤原道長、当代一の文化人と称された藤原公任——時代のオピニオンリーダーたちが『源氏物語』を読み、かつ評価していた事実を、式部は日記に書き残したのです。この記述からは、『源氏物語』が単なる女の慰みものなどではなく、男も読むに値する作品であるという、紫式部の人知れぬ矜持をうかがうことができるでしょう。

教養のない女は「使えない」が、ありすぎる女は鼻につく。それが「女性が才能を開花させたとされる時代」の限界でした。男性社会が求める女性像と自我との板挟みに生きにくさを抱えつつ、その男性社会にあえて身を委ねることしか「正当な」評価を勝ち得ることのない、式部にとっての厳しい現実が、そこには横たわっていたのです。

『源氏物語』の評価は、式部の死後大きく変容していきます。男性社会における『源氏物語』の地位を不動のものにした人物が、歌道の大家・藤原俊成(1114~1204年)で

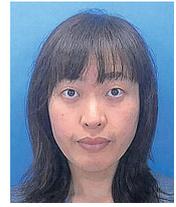
す。彼は「源氏見ざる歌よみは遺恨のことなり」(歌詠みが『源氏物語』を参考にしないとは残念なことよ)と公言し、『源氏物語』を歌人の必読書と位置づけました。和歌こそが第一の文芸であり、物語はサブカルチャーにすぎないとされていた格付けが、こと『源氏物語』に関しては完全に帳消しとなった瞬間でした。俊成のお墨付きを得た『源氏物語』は、以後貴族文化を代表する作品としての権威を帯びていくことになります。

ところが、そのころから『源氏物語』の作者をめぐる様々な伝説が生み出されていきました。「『源氏物語』には実は藤原道長の手が加えられている」とか、「父の為時が物語の大筋をつくり、式部に細部を書かせたのだ」という、いわゆる〈男性作者説〉です。あのような大作を女が一人で書けるわけがない、学識ある男たちの助力があったのだらう、というわけです。さらには、「紫式部は石山寺の観音の化身だった」という荒唐無稽な伝説まで。観音の生まれ変わりといえれば聞こえはよいですが、『源氏物語』が成ったのは(式部の才能ではなく)観音の靈験によるものだというわけですから、結局発想の源流は同じでしょう。『源氏物語』が男性社会における〈権威〉に認められその地位を確立したがゆえに、かえって式部自身は作者が受けるべき「正当な」評価から遠ざけられ、貶められるという皮肉な結果を生み出してしまふのです。

江戸時代になると、さすがに〈観音化身説〉のような伝説は否定されますが、代わりに強調されていったのが、式部の「婦徳」という側面でした(安藤為章『紫家七論』1703年ほか)。さらに明治時代になると、列強諸国と肩を並べるべく女子教育の整備を図ろうとする男たちの思惑により、その一面のみがやたらと誇張されていきます。すなわち、『源氏物語』ほどの大著を成したあの偉大な式部でさえ貞淑温良に生き、学才をひけらかすことなく謙譲を貫いたのだから、すべからく女子たるものかくあるべし」というわけです。こうして紫式部は「良妻賢母」の代表格として、帝国日本の国力に益する女子教育に奉仕すべく位置づけられ、それは終戦まで長らく続くことになったのでした。

作品や作者の評価には常に時代のバイアスがかかります。では、現代に生きる我々は紫式部を「正当に」評価しているといえるのでしょうか。改めて問い直す必要があります。そうです。

エッセイ **コロナ禍で苦しむ女性たち**



心理学部准教授 **高野 恵代**

本稿を執筆している1月現在、オミクロン株が流行し、第6波の真っ只中。国内の新型コロナウイルス（以下、コロナ）感染者が累計200万人を超えたとも報道されています。2020年3月以降、世界人類はパンデミックを体験してきました。パンデミックは人々に強い恐怖や不安を引き起こします。その結果、買い占め行動や心理的な分断、差別や攻撃、スティグマを生み出しました。ポーリン・ボス（2020）は「コロナの流行による不確かさは、ビジネス、コミュニティ、家族、個人など様々なレベルで起きている」とし、不要不急の外出は避けるといった自由の喪失、いつも通りの人間関係の喪失、金銭的・経済的な喪失、安全性の喪失など、これらはすべて「曖昧な喪失」と述べています。

それでは、女性はどういった「曖昧な喪失」を体験しているのでしょうか。内閣府や厚生労働省の調査結果から、男性と女性で異なる様相がみられました。

○DV件数の増加

配偶者や恋人からの女性に対する暴力（性犯罪、性暴力）が増加、深刻化しています。2020年の男女間における暴力に関する調査によると、配偶者から暴力を受けたと回答した女性は22.5%、つまり約4人に1人が経験したのです。さらに、前年の2019年と2020年のDV相談件数を比較すると、2020年は前年の同時期と比べて約1.5倍となっていました。コロナ禍の生活不安やストレス、外出自粛による在宅時間の増加が影響していると考えられますが、それだけではなく、コロナ以前には見落とされていた精神的暴力や経済的暴力がコロナによって顕在化したのではないのでしょうか。

○就業の困難さや収入の減少

非正規労働者としてサービス業などに従事していた人が、収入を失って経済的に困窮し、就業状況も厳しいものとなっています。とくにひとり親家庭や単身女性では、女性の収入減少が家計に大きな影響を与えています。現在、母子世帯の母親就業率（81.8%）は、一般世帯の女性の就業率（66.0%）に比べると高いですが、その半数以上は非正規雇用労働者なのです。さらに、完全失業率の推移をみると、シングルマザーの失業率が子どものいる有配偶者に比べて増加していることが示されました。

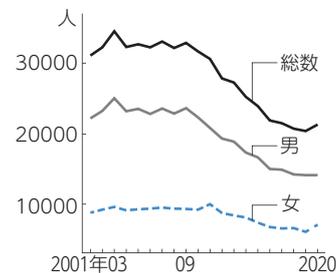
○家事・育児・介護の負担

コロナ拡大前とコロナ影響下で、家族と過ごした時間の変化と子育てのしやすさや生活全体の満足度関係を比較してみると、性別で異なる結果がみられました。男性は家族と過ごす時間が増加した人の方が、そうでない人に比べて満足度が高い一方、女性は家族と過ごす時間が増加した人の方が、満足度が低いという結果となりました。これは男女間での性別役割意識、不平等さを反映していると考えられます。また、男性（夫）の方が女性（妻）よりも現実を肯定的で楽観的に認知する傾向があることから（柏木・平山、2003）、夫婦間の意識のズレが生じて

いると推察されます。働き方改革を推進するだけでなく、家庭内において男性もケアの役割を積極的に担うなど意識改革が必要かもしれません。

○自殺者数の増加

最も懸念すべきは、女性の自殺者数の増加です。厚生労働省と警察庁の調査によると、2020年の自殺者数は前年より4.5%増の21,081人で、女性は7,026人（前年比で935人の増加）と報告しています。これは過去2番目に高い伸び率であり、コロナの影響で生活困窮や家庭内の問題などが顕在化したと思われます。幅広い年代において前年比で増加傾向にありますが、とくに無職者と女子高校生の増加が顕著です。女性の自殺の背景には、経済的な問題、就労や働き方の問題、DV被害や育児・子育て・介護の悩み、精神疾患など様々な問題が潜んでいるといわれます。人と接する機会が少なくなり、今後も経済的に不安定な生活を強いられると、自殺リスクがさらに高まる危険があります。そのため、自殺防止を謳うだけではなく、複雑に絡み合った背景要因に総合的にアプローチする支援や、SNS等を利用してあらゆる手段を使った対応が求められます。



令和3年版自殺対策白書より自殺者の推移 (厚生労働省, 2021)

データから、特に青年期から中年期の女性は、雇用や生活面、心理面に大きな影響を受けていることが明らかになりました。女性から相談機関に繋がるケースは良い方で、多くは援助希求どころか、そのようなエネルギーもわからないほど追い詰められているでしょう。女性の変化に気づく場所に支援者が足を運ぶアウトリーチ、そして女性達の声なき声に耳を傾け、支援を求める女性とともに身近な環境を変えていく社会資源の提供が求められます。災害時のこころのケア指針には、「安全」「鎮静」「人とのつながり」「自己効力感」「希望」があります。この5原則が機能しながら、問題を完全に解決できなくても（できればベストですが）、解決できない状況を抱えながら安定して生きていく力＝レジリエンスを高める支援が必要です。緊急支援の後、つまり、ポストコロナでは、ジェンダーの視点を取り入れた女性の経済的自立をサポートできる社会保障制度の充実がより一層求められるでしょう。

シリーズ 学内にあるジェンダー

ジェンダー・ダイバーシティ表現演習 - 演じて伝えるジェンダー意識 - どんな活動をしているの？

ジェンダー・ダイバーシティ表現演習は、ジェンダーに関して考えを深めていくとともに、演劇を通じてジェンダー問題への意識を発信していくプログラムです。このプログラムでは、ジェンダーという繊細で曖昧なテーマについて、自らの意識を言語化し表現する過程が重要視されます。その過程で、自分の価値観や常識が問いただされる機会が多く訪れます。明確な答えがないテーマだからこそ、十人十色の価値観が存在し、それが同じになることはないです。このプログラムでは本学の理念である「違いを共に生きること」の難しさと、それに向き合おうとする学生の姿が見られます。

ジェンダー・ダイバーシティ表現演習では毎年、作成した演劇を劇場で披露しています。しかし、昨今の状況では残念ながら劇場で観客を呼ぶことができず、去年に続いて今年も公演を中止するという判断を下しました。そこで、今年は別の方法で演劇を発表できないかと考え、初めて学内を舞台とした映像作品を制作することにしました。そして、本来であれば劇場で公演を行うはずだった9月下旬に演劇の撮影が行われました。こうして完成した映像作品「普つう じょうシキ 当たりま工」は、学校関係者向けにインターネット上で公開され、その後、星が丘キャンパスと長久手キャンパスにて学内上映会も行われました。



(林桃歌、羽生勇太)

感想紹介！

授業風景の取材も行った私たちステレオリムーブ課の感想と、作品を作り上げた受講生たちの感想をご紹介します。

私が作品の中で最も印象に残ったのは、マスクが外せない人の物語です。その中での「人に平気に見せられることでも、誰かにとっては見せられないこともある。それをみんな見せているから見せろと言われても、それは暴力だと思う。」という台詞です。その人の立場になってみると、それが良い事なのか悪い事なのか分かりません。そんな曖昧なものだからこそ、自分の言葉や行動に責任を持って、たくさん考えないといけないと感じました。

ステレオリムーブ課 林桃歌



劇場という限られた空間での演劇と違って、大学の敷地内という広大な空間で撮影したからこそできるダイナミックな演出や、目まぐるしく変化する場面が魅力的で、惹きこまれている間に1時間が過ぎ去っていました。受講生たちが授業内で共有していた身の周りで体感したジェンダー問題も作品の所々に練りこまれているので、あまりジェンダーについて意識したことのない人でも共感することができるのではないのでしょうか。

ステレオリムーブ課 羽生勇太



受講生



みんなでジェンダーについて話し合い、それぞれの悩みも共有することで、自分らしさを見つめなおすことができました。自分がセクシャルマイノリティであることから抱いていた劣等感のような負の感情を抱くことなく、ありのままの自分をさらけ出すことができ、とても居心地がよかったです。仲間と共に1つの演劇を作り上げていくのはとても楽しい経験でした。

2021年度は、劇場での発表を行う予定です。臨場感のある劇場ならではの演劇を見るのが楽しみです！

----- ジェンダー・ダイバーシティ表現演習の演劇が見たいと思ったあなたへ！ -----



ジェンダー・ダイバーシティ表現演習が今年度制作した映像作品「普つう じょうシキ 当たりま工」は、こちらのQRコードから視聴できます！

※視聴には、学内用のMicrosoft アカウントが必要です。



シリーズ
ゆるりと巡るジェンダー研

第2回 東海ジェンダー研究所



東海ジェンダー研究所は、1997年に内閣総理大臣の設立許可を受けて設立した財団法人です。東海ジェンダー研究所では主に、ジェンダー研究への支援やジェンダー問題に関する冊子の発行・イベントの開催を行っています。今回は、そんな東海ジェンダー研究所で西山恵美代表理事と近田幸子事務局長の2人に取材を行いました。



東海ジェンダー研究所では、ジェンダー研究を行っている研究者や、海外で活躍している方を招いた講演会や講座が定期的に行われていて、誰でも参加することができます。規模の大きな講演会だと、2017年に研究所設立20周年を記念して、スタンフォード大学のエステル・フリードマン教授を招いた国際講演会が開催されました。スタンフォード大学の教授の講演を聞けるなんて、すごく貴重なことですね。このようなイベントの場で東海ジェンダー研究所は、有識者の話を聞くだけでなく、参加者が有識者と共に話し合う場を作ることを目指して

ています。そのために、講演後の質疑応答を利用した講演者と参加者が意見を交換できる環境づくりや、講演者との距離が近い講座の開催などを行っています。東海ジェンダー研究所は、真の平等を実現するためには、人それぞれの立場や考え方を理解することが必要不可欠だと考えています。その理解をするために必要になってくるのが議論という人同士の意見のやり取りだと東海ジェンダー研究所は考えているのです。そのため、イベントの場で議論も行うことを重視しているのです。私たちにも、話してみると、それまでに思っていたその人のイメージと全然違ったことがありますよね。これは、ジェンダー問題を扱う際でもいえることだったのです。



東海ジェンダー研究所は、2017年に名古屋大学と連携して、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリを創設しました。この施設には、私たち大学生をはじめとした多くの人々にジェンダー研究を身近に感じてほしいという思いが込められています。東海ジェンダー研究所には、この思いのほかにも理想とすることがあります。それは、資料を見ながらみんなで和気あいあいと話し合うことのできる空間を作ることです。誰かが心の底に抱えている問題は、簡単に見つけ出すことはできません。それを見つけ出すためには、相手と心の声のやり取りをして、相手を深く理解することが必要なのです。東海ジェンダー研究所は、その理解に繋がりがやすい話し合える空間を作ること理想に掲げ



たのです。海外でも実際に、くつろいで資料を読みながら話し合いやすい環境を整えた図書館やカフェが実在しているそうです。私たちは、図書館では静かにしないといけないことや、本を汚してはいけないことをよく学校などで教わるのをごく意外に感じますよね。でも、このようなリラックスできる空間は、人の心を解きほぐして、正直な気持ちを相手に伝えやすくなるのではないかと私は思います。東海ジェンダー研究所では、このような空間を通じて誰かと意見を交換することは、自分の意見をはっきりと持ち、互いを深く理解することに繋がると考えているのです。

2022年は、東海ジェンダー研究所の設立25周年ということで、25周年記念誌の作成を予定しているそうです。この冊子では、過去から続いている東海ジェンダー研究所の25年の歴史を現在で振り返って、まとめることで、未来へと進む糧とすることを目的としています。完成がとても楽しみです。

(羽生勇太)



東海ジェンダー研究所

代表理事:西山恵美

所在地:愛知県名古屋市中区金山1-9-19 ミズノビル6F

2021年度のステレオリムーブ課の活動



2020年度に発足したステレオリムーブ課も今年で1年を迎えました。2021年3月に発行した第50号ニューズレターは大好評を頂き、幅広い活動のきっかけにもなりました。そんな2021年度の活動内容をご紹介します。

<4月>

- ・尾張旭市民生活部多様性推進課より男女共同参画審議会へ学生を推薦して欲しいと依頼頂き、ステレオリムーブ課の学生が一名審議会へ参加しました。
- ・中日新聞の取材を受けました。ステレオリムーブ課が立ち上がった経緯・編集の過程・今後何をしていきたいか、などをインタビューくださり、2021年5月14日付け中日新聞朝刊（愛知東部版及び名古屋市内版）に掲載されました。幅広い世代の方が読んでいる新聞に掲載されることで、私たちの活動がより広まるきっかけになったと思います。

<5月>

- ・岡崎西高校 放送部のみなさんからのインタビューを受けました。ジェンダーに関する映像を作成することのことで、私たち大学生との意見交換が中心となりました。「ジェンダーレス制服」をテーマに、ジェンダー平等について意見を出し合うと、高校生が制服について様々な考え方を持っていることがわかりました。中高生がジェンダーにもっと興味を持ち、一人一人が自由な選択をすることができるのと良いなと感じました。

<6月・7月>

- ・6月16日付教育學術新聞（日本私立大学協会発行）にステレオリムーブ課の活動が掲載されました。
- ・オープンキャンパスに参加しました。研究所を訪れた高校生の中には、「自分の好きなことを表に出せなかった」「みんなと違っていいことを隠してきた」などの悩みを持つ生徒もいて、改めてジェンダー平等への理解度の低さを感じました。対して、「入学したら研究所に遊びに行きたい」という学生もいて、ジェンダーに興味を持っている若者が増えていることにも嬉しくなりました。

<8月>

- ・日本女性学習財団の発行する月刊誌『We learn』9月号へ寄稿しました。研究所の開設科目である「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」について取材しその報告と、ステレオリムーブ課の今後の展望を書きました。
- ・愛知県女性総合センター・ウィルあいち情報ライブラリーの団体活動PRパネル展へ参加し、ステレオリムーブ課の活動を報告しました。
- ・新メンバーが一名加入しました。

<10月-1月>

長久手市男女共同参画情報紙「自分らしく」を長久手市くらし文化部たつせがある課と協働して、作成しました。12月には長久手市の中学校へ取材に行きました。情報紙は2022年度春に長久手市内の中学生へ配布される予定です。



ステレオリムーブ課が発足して1年が経過しますが、各メディアから取材で取り上げていただいたり、中・高校生とジェンダーについて話す機会を得たりと、より深くジェンダーについて考え発信することができました。今後も私たちの活動を通して、ジェンダーについて興味を持ち、ありのままに生きることの重要性を知っていただければ幸いです。（立松里菜）

Cinema Discovery



「リリーのすべて」(原題: The Danish Girl)

あらすじ

1926年、コペンハーゲンで活動している風景画家のアイナー・ヴェイナーは肖像画家の妻ゲルタと平穏に過ごしていたが、ゲルタに頼まれて女性モデル役を引き受けたのをきっかけに、自らに潜む女性の存在に気づいてしまう…

女性としての自分に悩むアイナーが医師に「貴方はおかしい」と言われるシーンがあります。当時のトランスジェンダーの認識の低さ、現代とのギャップに驚かされます。

(前畑朱里)

本学の図書館でこの作品を観ることができます。興味が出たら是非観てください！

第40回 定例セミナー

「ジェンダーのいまを考える ～愛知淑徳大学のジェンダー教育を振り返って～」

講師 平林美都子(本学文学部教授)、石田好江(本学名誉教授)

2021年10月18日(月)、第40回定例セミナーを開催しました。本学文学部教授の平林美都子先生、本学の元副学長で名誉教授の石田好江先生をお迎えし、本学非常勤講師である石河敦子先生の司会進行のもと、本学のジェンダー教育のこれまでとこれからについてお話しを頂きました。共にジェンダー・女性学研究所の所長も務められたお二人は、本学のジェンダー教育の始まりから、研究所が1996年と2016年に行った「社会における男女のあり方に関する意識調査」や平林先生の近著『女性同士の絆』に触れ、学生の皆さんへのメッセージを語られました。平林先生は「女性同士」とは、生物学的な性別ではなく「人間とは傷つきやすいものだ」という立場に立った人と人との関わりであると定義したうえで、かわいそうだという感情を伴う「シンパシー」ではなく、相手のことを理性的に想像する「エンパシー」が女性同士の関係性づくりには大切になってくると語られました。このエンパシーを、たとえ自分が相手と違う考え方で、その人の立場に立って考え想像する能力であり、助けてもらう、助けてあげるという関係ではなく、対等な関係性を持ちながら一緒にやっ



と、と解説。このことはジェンダー教育の中で一番学んでいたきたいことです、と講演会を締めくくりました。

以下にセミナーを受講した学生の感想を紹介します。

- ・ジェンダー問題は決して個人の問題ではないと学ぶことができた。
- ・LGBTの話などでどうしても今まではシンパシーでいたのが他人事でしたが、これからはぜひエンパシーとして自分のこととして考えていきたいと思いました。
- ・今回のセミナーでエンパシーという考え方を知って、本当の意味での「共感」を学べた。ジェンダーから逃げずに、もっと様々な考えを学んでみたいと思った。
- ・この90分間で今まで考えた事がないほどジェンダーについて考えた。このセミナーがいつか私の人生の中で大切なものになると思った。



2021年度研究所の1年

2021年度は愛知県下にも緊急事態宣言が何度か発令され、その間は研究所も閉所となりました。閉所期間中には学生たちから「ジェンダー研が開いていないのは寂しい」という声も聞かれ、ジェンダー・女性学研究所が学生の居場所の1つになっていることを実感しました。

学生から購入図書のリクエストを受け付けたり、ジェンダー研究会coalookにオススメ図書のPOPを描いてもらったり、と学生と共に研究所をつくっていきました。

研究所が開催したイベントで他ページに記載のないものを写真とともに紹介します。

- ・6月バーチャル研究所開所…緊急事態宣言下で研究所が閉鎖されている期間にオンラインで「ジェンダー問題についてゆくりと話す会」を毎週水曜日に行いました。いつも研究所に顔を出してくれる学生たち4～5名が集まり日頃感じているジェンダー問題について話し合いました。
- ・6月愛知教育大学付属岡崎中学校2年生の生徒さん来所。「女性と職業について」をテーマに坂田所長と本学心理学部久保南海子教授と対談しました。
- ・7月～購入図書リクエスト…毎月購入している研究所の図書の内、2冊を学生からのリクエスト図書枠としました。毎月沢山のリクエストが寄せられ、実際に購入した図書は研究所を訪れる学生たちによく借りられています。
- ・7月～ジェンダー研究会coalookメンバーによるオススメ図書展示…雑貨店風のPOPを作ってくれました。そのPOPを見て

図書を借りる学生も多数。

- ・12月ジェンダー・女性学研究所倫理委員会規程施行…ジェンダーやダイバーシティに関わる研究について、研究所で倫理審査を実施できるようになりました。
- ・12月、1月ドキュメンタリー「ボーダー心のままに生きる「性」」上映会/ディレクターズトーク (GLOCOM、国際交流センターとの共催)
- ・1月グローバルラウンジイベント「世界の恋愛ナイン～考えよう! LGBTQ+のこと～」協力…研究所からはイベントのアドバイスと映画紹介を行いました。また、期間中に研究所の本をグローバルラウンジに並べて頂きました。
- ・1月「第14回ジェンダー視点の卒業論文・卒業制作報告会」…6名の学生が卒業論文・卒業制を発表しました。



ジェンダー・女性学研究所第51号ニューズレター 目次

- ★ステレオリムーブ課によるアンケート特集……………2～4
- ★学生エッセイ……………5
 - 「相手に寄り添う管理栄養士を目指す」榊原慎也（健康医療科学部4年）
 - 「志望動機と実習での気づき」佐藤和磨（福祉貢献学部3年）
- ★教員エッセイ
 - 「『源氏物語』の評価／紫式部の評価」外山敦子（文学部教授）……………6
 - 「コロナ禍で苦しむ女性たち」高野恵代（心理学部准教授）……………7
- ★学内にあるジェンダー「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」……………8
- ★ゆるりと巡るジェンダー研第2回「東海ジェンダー研究所」……………9
- ★ステレオリムーブ課活動報告／Cinema Discovery……………10
- ★第40回定例セミナー報告／研究所の一年報告……………11

施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です！

開室日 毎週月曜日～金曜日

開室時間 9:00～17:00

場 所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階エレベーター前

遊びにきてね！



ペット型ロボット“プレオちゃん”います。

ASU・IGWS2021年度

運営委員

坂田陽子(所長兼) 平林美都子 佐藤朝美 小倉史
前田恵子 井上知香 江崎那留穂 菅野淑 福本明子

学生運営員ステレオリムーブ課

北原優奈 立松里菜 前畑朱里 川端菜月
林桃歌 羽生勇太 柴田莉穂 後藤優花

事務担当

椿加菜子

編集後記

つかみどころのない“ジェンダー”。男女ありきの長い人類の歴史から考えると、男女を超えた意識はまだまだ始まったばかり。情報の発信者も受信者も試行錯誤しながらより良い方向に進んでいる黎明期だと、この一年で学びました。(所長 坂田陽子)

さあ、動き出そう。

©MOMO

発行年月日：2022年3月1日
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目9
Phone 0561-62-4111 ex. 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

